

第17部会

以上から新旧教科書にみられる宗教的要素の内容について比較してみると、まず旧版教科書では個々の宗教名には言及されず、いくつもの宗教コミュニティから人物が登場している。しかし、祭りや遺跡など具体的な宗教文化を題材とし、また歴史上の偉人や物語の登場人物などはその宗教的属性がわかり、そして、それらはヒンドゥー教中心の視点からの記述である。一方、新版教科書ではそういった宗教的要素については注意深く避けているように見受けられる。例えば、祭りを取り上げない、神話や説話などに取材したものも減らすなどである。また、そういった要素を含む課教そのものが旧版に比べ減っていることも挙げられる。つまり新版教科書では宗教的要素の度合いが弱くなっているのである。以上のことから、前BJP政権後に作られた新版ヒンディー語教科書は、旧版に比べより非宗教的になり、そのことから旧版教科書には当時のBJP政権のヒンドゥー至上主義的な影響があったと考えられる。

川崎市田島小学校における神道教育事例の

考察——山崎博を中心に——

中道 豪 一

一 本発表の強調点

- ・ 田島小における神道教育事例の指摘
- ・ 神道教育における田島小の位置づけ

二 キーワード

山崎博 田島小学校 体験教育 入澤宗壽 文化教育学

三 要旨

本発表は神道教育研究の一環として、大正から昭和にかけて実践された田島小学校（神奈川県川崎市）の教育事例から、神道教育にあたるものを指摘したものである。

舞台となる田島小は、ドイツ文化教育学に基づく体験教育を実践した学校として教育史に名を馳せている。その実践は全国的な注目を浴び、最盛期には全国から見学者が押しかけ、ついには參觀停止にまで至るほどであり、世界新教育会議では二度もその取り組みが発表されている。「体験により体験にまでの教育」を旗に掲げた実践は田島体験小学校とまで呼ばれるまでになった。

こうした実践は東京帝国大学の入澤宗壽と、田島小校長である山崎博によつて運営された。文化教育学の研究者であり、実践志向の強かった入澤と、教育改善を熱望する山崎の意図が重なり合い実現した実践は、『日本田島に於ける新教育の実際』『我が校の体験教育』などの書物にまとめられ、現在に伝えられている。入澤については「入澤宗壽の神道教育」〔明治聖徳記念学会紀要〕復刊第四五号、平成二〇で考察を為した。

田島小の特色は、文化価値の体験を通して、新たな文化を創造していける人材の育成にあった。現実的な実践を組織する際、必然的に日本という風土を意識した人間教育が計画され、その中に神道が姿を現すのである。ここに神道教育の事例研究としての意義がある。

その特徴は、神道を教えるというよりも、神道を発展させていく思考を培うという点にあった。ただし、これは入澤や山崎が、神道を強調したというよりも、彼等の目指す理想像に神道が一致したという方が適当である。実践基盤となった文化教育学は、文字通り文化を重視するが、そうなると日本において運用する際、神道は必然である。こうした経緯は「和魂洋才」などの用語がそれを裏付けている。

以上のような実践に考察を加えると、神道家や神主の行なう教育活動や、石門心学や尊徳仕法といった神道に触れる社会教育活動とも一線を画していることが指摘できよう。これらの事例を、「如何にカリキュラムを作成するか」という観点から捉えると、以下のように分類ができる。

- ・「直接型」 教育者の思うがままに神道素材を采配できる
- ・「間接型Ⅰ類」 国語、歴史などのカリキュラム（学校）を通して間接的に神道を扱う
- ・「間接型Ⅱ類」 人材育成などのカリキュラム（社会）を通して間接的に神道を扱う

またこの実践が、現代に於ける教育活動において、活用可能であり、発表者が一部実践済であることも付け加えておきたい。